

中学生の「ゆとり」経験について(2)

—「ゆとり」感とそれを感じている経験に対する考え—

西野 仁 (東海大学)

I、はじめに

公立学校の完全学校週5日制が本年4月より始まった。それは、1992年からの月1回の土曜休校、1995年4月からの月2回の土曜休校を経て、10年かかっていた改革であった。児童・生徒の生活にもっと「ゆとり」を持たせようというこの教育制度の大改革によって、週間リズムは従来の「6 and 1 (6日登校1日休み)」から、「5 and 2 (5日登校2日休み)」との併用へと転換することになった。この改革に対する評価が必ず求められようが、そのためには、改革前の「ゆとり」経験の実態をしっかりと把握しておく必要がある。それなくしては、改革前後の比較はできにくい。こうした考えを背景に、首都圏に住む高校生を対象に、1996年に一週間にわたり Experience Sampling Method (経験標本抽出法、以下ESMと略す)を用いて調査研究を開始した。(Nishino, 1997; 西野・知念, 1998; 西野, 1998; 西野, 1999) さらに、1999年から日本学術振興会科学研究費の補助を受けて、中学生を対象に同様な調査研究を実施した。これらの研究から、高校生、中学生双方とも①ゆとり感に週間リズムが存在していること ②ゆとりを感じやすい活動、場所、同伴者は特定できること、③ゆとりを感じている時はポジティブなムードが目立ち、感じていない時は、ネガティブなムードが目立つことなどが明らかになった(西野, 1999)。本調査研究は、それらの続編であり1999年12月から2001年1月にかけて収集した12校499名から得た11,316件の中学生の日常生活経験のサンプルを使って、「ゆとり感とそれを感じている経験に対する考え」および「気分」について分析したものである。《本研究は、平成11年度～13年度日本学術振興会科学研究費(課題番号11680054)の補助金を基に実施された。》

II、研究の目的と方法

1、研究の目的

人は、日常生活のある場面では大いにゆとりを感じ、また別の場面では、全くゆとりを感じない。ゆとりを感じている時と、逆に、ゆとりを感じていない時とでは、その時経験していることを、『自分で選んだのか、それとも、求められたからか』、『もっと続けたいと考えているのか、それともやめたいのか』など、経験に対する考え方の程度に違いがあると推測できる。

本研究は、中校生の日常生活において、「ゆとり」を感じている程度によって、その時行っていた経験に対する考えや気分がどう異なるかを明らかにすることにある。具体的には、「ゆとり」感の程度と、その時経験していることに対する「活動選択の自由性」、「動機の内発・外発性」、「活動継続の欲求」、「活動への取り組みに対する真剣さ」、「活動の難易性」と「気分」について記述することにある。

2、研究の方法

1) 調査法・対象者・調査時期

Experience Sampling Method (ESM)を用いて、データを収集した。ESMは、人の起床時から就寝時までの目覚めている間の「日常生活経験」を母集団とし、そこから「経験の標本」をラ

ランダムに抽出し、それをサンプルデータとして分析し、人の日常経験を推測しようとする調査方法である。(西野・知念, 1998)

調査は、首都圏の中学校 12 校で学校長の許可を得て、2 年生の調査協力者を募り行った。調査に参加した生徒は 626 名であったが、あらかじめ定めておいたデータ数の基準に満たなかった 127 名の生徒のデータを除外し、残りの 499 名を分析の対象とした。(注: 第 31 回大会 (2001) 発表のデータに、さらに 2 校のデータを加え、より厳密なスクリーニングを行い残ったデータを用いた。) その内訳は、男子 223 名 (46%)、女子 276 名 (54%) であり、自己申告による学業成績がやや上位の生徒が多い傾向にあった。

調査は、1999 年 12 月から 2001 年 1 月にかけて行った。調査協力者の呼び出しは、アラーム付き腕時計(カシオデータバンク)で、午前 7:00 から午後 10:59 までの間に、2 時間毎にランダムに 1 回対象者を呼び出すことを原則に、木曜日から翌週水曜日までの 1 週間連続して行った。しかし、授業中に呼び出しすることを学校側に了解されなかったため、授業中は、呼び出しを行わなかった。集まったデータからさらに、呼び出しから 2 時間経過して記入されたデータを除外し、最終的に分析対象としたデータは 11,316 件である。

調査票の回収後、複数のコーダーにより相互にチェックしながら、活動内容と活動場所についてコード化した。ゆとり感の指標とした「ゆとり気分スコア *yutori feeling score*」は、7 段階の質問項目「あなたは、どの程度ゆとりを感じていましたか?」に「まさにそう感じていた」との回答を 7 点、逆に「全くそうは感じていなかった」を 1 点とした。ムードスコアなどの計算と分析は、統計プログラム SAS を用いた。

2) 記入遅れの状況

ESM は、できるだけある時点でのデータを遅れることなく抽出することにねらいの一つがある。時間が経ってからの記入は、価値観や態度などに影響され脚色された回答になり易いと考えられるからである。アラーム付き腕時計の呼び出しを受けたら、できるだけ速やかに経験内容を記入することを要請しているが、実際の状況はどうであったろうか。結果は、5 分以内に 51.8% が、30 分以内に 75.91% が、一時間以内に 89.4% の回答が記入されていた。

3) 回答に対する自己評価について

本 ESM 調査では、対象者に、その日の回答記入が正確であったかどうかを、自己評価するよう求めた。「ほとんど正確だった」から「ほとんどでたらめだった」の 7 段階の尺度において、「まあ正確だった」が 28.1%、「ほぼ正確だった」が 32.1%、「ほとんど正確だった」が 19.4% で、全体の約 8 割が正確だったと自己評価している。もちろん自己評価の数値がそのまま信頼できるとは考えないが、不正確あるいはでたらめだったとの評価を持つデータは分析の対象からはずしており、分析に使用したデータの信頼性は高いものとする。

III、結果および考察

1、ゆとり感と「選択の自由性」「動機の内外発性」「継続欲求度」「活動への真剣度」「活動の難易度」の関係

「ゆとり感」は、たしかに場面によって変化するのだが、似たような場面や活動では、「ゆとり感」の程度も似てくる。ゆとり感と「選択の自由性」「動機の内外発性」「継続欲求度」「活動への真剣度」「活動の難易度」の関係は、表 1 のようであった。なお、それぞれの項目の実際の質問形式は、表下の Note 2 に記したとおりである。

表1 ゆとり感と選択の自由性, 動機の内外発性, 継続欲求度, 活動への真剣度, 活動の難易度

ゆとり感		選択の自由性	動機の内外発性	継続欲求度	活動への真剣度	活動の難易度
まさに感じる	平均	6.51	5.92	6.07	4.64	6.09
	標準偏差	1.18	1.75	1.52	2.10	1.67
	度数	2990	2988	3007	3001	2997
感じる	平均	6.07	5.38	5.58	4.58	5.71
	標準偏差	1.28	1.66	1.42	1.67	1.70
	度数	1689	1690	1697	1693	1696
まあ感じる	平均	5.76	4.90	4.93	4.33	5.36
	標準偏差	1.37	1.72	1.54	1.63	1.77
	度数	1724	1729	1733	1730	1731
どちらとも言えない	平均	5.27	4.44	4.35	4.30	4.79
	標準偏差	1.55	1.64	1.53	1.50	1.85
	度数	2088	2086	2092	2092	2089
ほとんど感じない	平均	5.26	3.87	3.85	4.50	4.39
	標準偏差	1.65	1.86	1.73	1.69	2.14
	度数	834	832	833	832	833
感じない	平均	5.21	3.67	3.23	4.62	3.90
	標準偏差	1.83	1.97	1.75	1.74	2.21
	度数	482	482	483	482	484
全く感じない	平均	5.27	3.66	3.09	4.41	4.01
	標準偏差	2.21	2.31	2.27	2.31	2.54
	度数	1008	1006	1008	1006	1008
ゆとり感	相関係数	0.30***	0.40***	0.53***	0.04***	0.36***

Note1:***p < .0001

Note2:実際の質問項目とスコア

選択の自由性:それは自分で選んだ活動ですか?するように求められた活動ですか?

自分で選んだ 7 --- 求められた 1

動機の内外発性:それは、その活動そのものがやりたかったためですか?他の目的のためですか?

活動そのもの 7 --- 他の目的のため 1

継続欲求度:それを、もっと続けたいですか?やめたいですか?

もっと続けたい 7 --- やめたい 1

活動への真剣度:それをどのくらい真剣にやっていましたか?

真剣だ 7 --- 真剣ではなかった 1

活動の難易度:それをやる事はあなたにとって簡単なことですか?チャレンジを必要とすることですか?

チャレンジが必要 7 --- 簡単 1

2、ゆとり感と「動機の内外発性×選択の自由性」および、ゆとり感と「継続欲求×活動の難易度」の関係

「動機の内外発性×選択の自由性」とゆとり感の平均値、「継続欲求×活動の難易度」とゆとり感の平均値の関係は図1および図2のようであった。図1に見るように、動機の内発性が高く選択の自由性も高い経験時にゆとりを感じる傾向にあること、しかし、動機が外発的な経験時にはゆとりは感じられにくい。また、図2に見るように、ゆとり感を伴う経験は、もっと続けたいという継続欲求が高く、それをすることは比較的易しいと感じられていることがうかがえる。

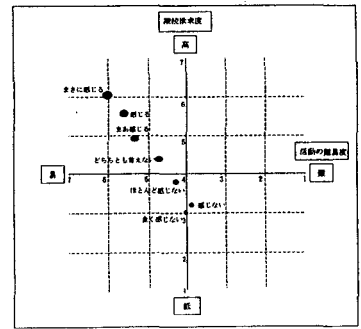
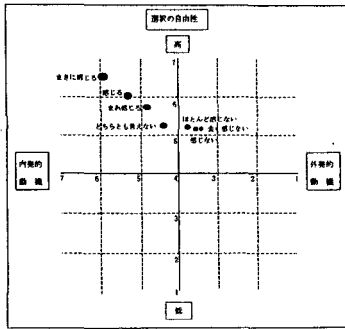


図1 「動機の内外発性×選択の自由性」とゆとり感 図2 「継続欲求×活動の難易度」とゆとり感

3、ゆとり感と気分の関係

ゆとり感を強く感ずる時と感じていない時とでは気分が異なる。図3は、ゆとり感と10のムードとの関係である。大いにゆとりを感じている経験時の気分はいずれもよりポジティブである。

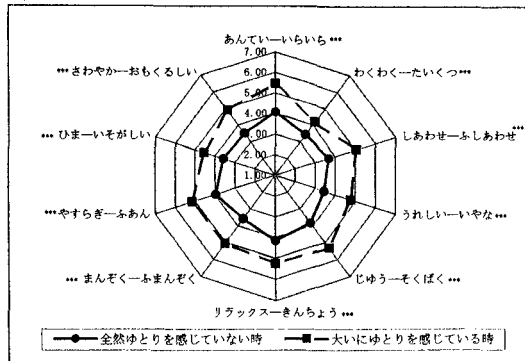


図3 ゆとり感と10のムード

また、「ゆとり感」を従属変数とし、10の気分項目を独立変数として線形回帰モデルに当てはめると、「さわやか」、「ひま」、「まんぞく」、「うれしい」の4変数の組み合わせのR-Squareが最も高かった。(R-Square 0.1364)

IV、まとめ

これらの結果から、中学生の「ゆとり」経験は、「選択の自由性と内発的動機」によって惹起された経験で、「さわやか」「ひま」「まんぞく」「うれしい」などの「ムードのポジティブさ」を伴い、「継続したい」と感じる比較的「簡単にできる」経験の総体ととらえられよう。
参考文献 1) Nishino, H. (1977) Will the two-day weekend bring more leisure (yutori) for Japanese Adolescents? Thesis submitted for the degree of Doctor of Philosophy in Leisure Studies in the Graduate College of the University of Illinois.

- 2) 西野、高校生の「ゆとり経験について」—いつ、どんな場面で「ゆとり」を感じ、その時の気分はどうか—、レジャーレクリエーション研究第39号、50-53、1998
- 3) 西野・知念、ESMを用いた日常生活におけるレジャー行動研究の試み、レジャー・レクリエーション研究第38号：1-15、1998
- 4) 西野、(1999)、高校生の「ゆとり経験について(2)」—「ゆとり」感とそれを感じている活動に対する考え—、レジャーレクリエーション研究第41号、28-31